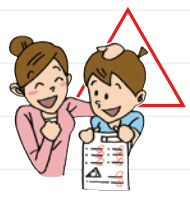
ADVICE 3 親の働きかけがより注目される

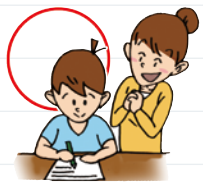
学校でグループワークの時間を確保するため、21世紀型能力の「基礎力」を習得するには家庭学習をしたうえで授業に臨むことが前提となるでしょう。「思考力」については、保護者の社会経験をもとに親子で会話をすることで養われます。例えば、一緒に食事に出かけたら、その店の席数を数えて客単価を想定し、「店を流行らせる秘策」というテーマで話し合ってみるなどです。

「実践力」は、計画的に物ごとを進める力や忍耐力、習慣づけといった**《非認知能力》**を育てることがポイントに。**非認知能力は子どもが小さいほど身につきやすく、また社会で活躍する原動力になります。**例えば、子どもが何か買ってほしいと言ったとき、すぐに買い与えるのではなく、まずは我慢させます。手に入れるための計画を立て（例えばお手伝いなど）、毎日実行します。貯まったおこづかいでようやく欲しいものが手に入る、といった具合です。

ギリギリにならないと着手しない**《先送り行動》**をするタイプの子は、納期間際に集中力を発揮して目的を達成させるかもしれませんが、計画的に行動した子よりも質は劣ってしまうもの。そこで、先送り行動の子に対しては、**目標達成を短期に設定するとよいでしょう。そして、保護者は結果よりも、努力した行動をほめることを大切に。**すると子どもは自分に自信を持ち、チャレンジし続けるようになります。

これまで以上に、家庭での接し方や過ごし方が大事になってくるのです。


結果をほめる


過程をほめる

女の子に多くみられる《先送り行動》
小さな頃から先送りさせないよう養うことが重要。

FOR ADVICE Ⅱ

親力を鍛えるしつけのプロ

教育評論家 親野（おやの） 智可等（ちから）さん
公立小学校で23年間教員を務めた経験と知識をもとに、メールマガジン「親力で決まる子供の将来」を発行、著書も多数。

叱らない会話で子どもの力を引き出す

教育がどう変わろうと、子どもは保護者の影響を大きく受けるもの。親も子も幸せと感じる親子関係を築けていれば〝親力（親の教育力）〟が発揮され、子どもの学力や人間力を効果的に伸ばすことができます。

親子関係が悪くなる一番の原因は叱りすぎ。「〇〇しなきゃダメでしょ。何度言ったらできるの」と叱られてばかりいる子は、「自分はダメな子だ」と思い込むようになり、自信を失っていきます。さらに叱られ続けると、親から嫌われていると感じ、関係が崩壊するだけでなく、他者を信じられなくなるのです。ですから、**子どもを叱らなくて済むような声かけの工夫をしてください。**例えば、勉強に取りかからない子の場合は、保護者が「一緒にやろう」と子どもに解いてみせるとよいでしょう。「先に宿題を終わらすと夜がラクだよ」などと前向きな言葉をかけます。

なお、思考力を養う方法として、ニュースになっている社会問題について家族で会話をしてみてください。「なぜ問題が起こったのか」「自分はどう思うのか」「どうすれば解決するのか」という視点を意識すれば、大学入試の小論文や面接の練習にもなります。また、「主体的に学ぶ」ことも大事です。これは、机の前に座って行う勉強のことだけではありません。**子どもが自分で興味関心のあることを見つけ、それにすすんで取り組んでいくことこそが「主体性」です。**本人がやりたいことを応援することが、子どもの力を引き出すうえで重要なポイントです。

学力向上をめざす〝大阪府〟
心豊かな人づくりを進める〝兵庫県〟

日本の教育が大きく変わろうとしていますが、各自治体でも独自の取り組みが進められています。地域の特性を踏まえた学習内容に注目です。

大阪府

学力向上に向けた中高の取り組み

大阪府の各中学校では、教育の成果と課題を検証し改善を図るために「チャレンジテスト」を実施している。生徒の学力状況を把握し、弱点を探ることで改善をめざす。高校では2011年度から、「グローバルリーダーズハイスクール（GLHS）」事業を開始。豊中高校や茨木高校など10校を指定し、豊かな感性と幅広い教養を身に付けた、社会に貢献する志を持つ、知識基盤社会をリードする人材育成を行っている。特に課題研究においては探究活動を通じて専門性を追求するとともに論理的思考力を育む。

独自DVD教材の活用で英語力を教科

英語学習では、2015年度末に小学校1～6年を対象としたDVD教材「DREAM」を作製。歌や物語を通して英語の音や文字に繰り返し触れることで英語に親しみ、自然に英語を学ぶことにより「聞く・話す・読む・書く」力を育成することがねらいだ。北摂地域でもすでに「DREAM」を活用している小学校がある。

意欲や英語力を重視する高校入試

2016年度入試からは、学科試験以外にも自己申告書や一部に面接を選抜評価に加え、高い意欲があれば入学を認めるなど制度を改善。また2017年度入試からは、TOEFLなどの外部検定の評価を受験時の英語のテストに換算できる仕組みが導入され、意欲や英語力重視へと制度が変わりつつある。

取材協力：大阪府教育庁

兵庫県

体験学習を通して子どもの自立心を養う

兵庫県の小・中学校では、**自然に感動する心を育み、自ら考え行動する機会を作ることで、自立心を養うこと**に重点が置かれている。

小学3年生では、自然観察などを年間3回以上体験する「環境体験事業」を、5年生になると4泊5日の「自然学校」で野外炊飯などを体験。さらに中学2年生では地域の企業などで社会体験をする「トライやる・ウィーク」を5日間実施。職場体験は他府県でも行われているが、5日という長期間、全県で実施している点が特徴だ。体験前は子ども達自身で計画を立て、体験後は内容をまとめて保護者や地域の人に発表し、体験だけで終わらないよう事前事後学習を充実させている。

環境体験

魅力・特色ある高校づくりの充実

高校では各校の特色化に向けて、2010年度から「インスパイア・ハイスクール」を実施。7つのテーマから各校が1テーマを選び、これに沿った授業や取り組みを展開している。例えば、理数教育研究の指定校では、大学教授や研究者などを講師に招き、講演会などを実施。国際交流研究の指定校では、テレビ会議などで海外の高校生と交流するなど、各校が魅力ある学校づくりを目指している。

自然学校

また、2015年の学区再編により、高校の選択肢が拡大したことも特色化に弾みをつけている。全体で約13％の生徒が旧学区外の高校に合格し、アンケートで6割の生徒が進路拡大を「良かった」と答えている。

取材協力：兵庫県教育委員会